

Alun-alun Kidul



概要

アルンアルンキドウルはクラトンの南側に位置する広場であり、*Pengkeran* (ジャワ語の *pengker* (後ろの意味)) と呼ばれることもある。18 世紀後半に作られ、儀式的な意味を持つ場所として使用され、王宮の象徴的な役割を強調するために設計された。アルンアルンキドウルを含む南北の軸は「ジョグジャカルタ哲学軸」と呼ばれ、2023 年にユネスコ世界遺産に登録された。

2 本の木

アルンアルンキドウルの中央には柵に囲まれたリングン・クルン (*Ringin Kurung*) と呼ばれる一対のプリングンの木がある。これはインドネシア語であり日本語ではガジュマルと呼ばれている。ガジュマルは根を多く出す特徴的な姿から「神聖な木」や「幸福の木」とされ、ジャワの王様やバリヒンドゥー教徒から「永遠のシンボル」として大切にされてきた。西側は勝利の意味を持つジャヤダル、東側は高貴の意味を持つデワンダルとそれぞれ名付けられている。

2 本の木に関する伝説

アルンアルンキドウルの 2 本の木には伝説があり、それは目を閉じて歩く伝説だ。目を閉じて歩く伝説は、王国の神聖さと王族の権威を象徴しており、ジャワ文化における神聖な空間を表現している。目を閉じて歩く伝説とはジャワの人に信じられている 2 本の木の間を目隠しをしたまま通り抜けられれば願いが叶うという伝説である。これはムベバス・アングインと呼ばれている。

どのように使われているのか

王宮の正面広場はアルンアルン・ロールのため、儀式や行事の中心はそこで行われてきた。しかし、アルンアルン・キドウル (南の広場) も王宮文化において重要な儀式の一部に使われてきた。例えば、王宮の宗教的・国家的行事 (グレベグ) の際、王宮からモスク、広場を通過して隊列が進むとき、アルンアルン・キドウルを通過することがある。これは王宮と市民をつなぐ象徴的な空間としての役割を果たしている。

まとめ

アロンアロンキドゥルは正面にはないため儀式などに使われるような中心的な存在ではないが現地の人や王室にとっても大切な役割をしていると感じた。